

『蜻蛉日記』和歌の一面

一章明親王との贈答歌を中心にして―

鄭 順 粉*

(e-mail : sunbun@pcu.ac.kr)

目 次

1. はじめに
 2. 仮想された恋歌
 3. 歌語の二重性を楽しむ
 4. 歌の主体のすり替え
 5. 散文に予見される和歌
 6. おわりに
-

1. はじめに

『蜻蛉日記』には、二六一首の和歌(長歌三首、連歌二組を含む)が記されているが、そのうち上巻には一二六首が数えられ、中巻の五五首と下巻の八十首を圧倒的に上回る。また、上巻には、兼家の和歌も、全四二首のうち、三六首(長歌一首を含む)が集中している。上巻の私家集的な性格については、従来多く指摘されており、例えば、今西祐一郎氏は「『蜻蛉日記』上巻とは、道綱母の家集めいた姿をとりつつ、一方では兼家の歌の収録を主たる目的として編まれた著述であるかのようにさえ思えてくる」と言われる¹⁾。それにしても、作者の道綱母は自分自身の内的必然から兼家の和歌を取捨選択し、

* 培材大学校 日本学科 副教授 日本古典文学

1) 「歌・歌集・蜻蛉日記」(『新日本古典文学大系 蜻蛉日記』1989 岩波書店) p.516。また、鈴木裕子氏「『蜻蛉日記』上巻の和歌―『百草に』と『身のあきを』の贈答歌について」(『駒沢短大國文』1999 03)には、上巻においては、和歌によるコミュニケーションが、二人の間でまだそれなりの効力を持ち、その力を作者も信じていた時代の記録となっていることが述べられている。

ある構成意識によって日記中に配置したのであろうから、兼家の和歌位相の展開、並びに道綱母の示す対兼家の詠歌および風流数奇に関する叙述が、上巻の中で如何なる役割を果たしているのか、を見なければならぬと思う²⁾。

そのような観点から、応和年間に兼家と章明親王の間で取り交わされた贈答歌は注目に値する。当該の贈答歌群は、応和二年(九六二)五月から応和三年(九六三)秋頃までつづき、日記においてちょうど天徳二年(九五八)七月から応和二年にかけての三年半の空白の直後に配置される。作者は、その空白の期間のものとして当然あったはずの贈答歌群を打ち捨てて当該の贈答場面を取り入れているのである。再び日記が書き始められる応和二年の記事が作者の代作を思わせる兼家と章明親王の贈答歌を中心に始まっているということは、その空白期間における和歌と散文の伸び具合を考え合せれば、作者の内部において歌の位置が移行していることを示すと見られる。当該の贈答歌群は、日記創作における作者の和歌への特別な意気込みを感じさせるものと言える³⁾。

本稿では、日記の中でやや異色と見られる章明親王との贈答歌⁴⁾を中心に『蜻蛉日記』の和歌を考え、日記の内的論理の一面を明らかにしてみようと思う。

2. 仮想された恋歌

応和二年、町の小路の女の件が一段落し、兼家と心のこもった和歌(長歌)贈答が記された後、兵部卿宮章明親王との交流の場面が始められる。

- 2) 例えば、川村裕子氏「右大将道綱母の結婚と人生一和歌を中心に」(『女流日記文学講座 第二巻 蜻蛉日記』勉誠社 1990)にも、上巻における和歌の重要性について述べられているが、それは主に兼家の和歌に対する素養に焦点が当てられている。本稿においては、当該の章明親王との贈答がなぜとりわけ作者の家で行われたかの問題をも含めて、『蜻蛉日記』の和歌全体の方法として取り上げている。
- 3) 増田繁夫氏「『蜻蛉日記』の和歌—十世紀後半の和歌史」(『国語と国文学』至文堂 1995 05)には、「『蜻蛉日記』の和歌を見れば、作者の時代の人々の歌が、『古今風』の様式に強く規制されて作られていたことがよく判る。この作者は、日記という新しいジャンルを開拓したけれども、その歌や歌についての見解は、当時の標準的な古今風の姿のものであった。もともと、歌についてはそうした保守的な立場にあったからこそ、自己の表現を、新しい姿の歌を追求することでは試みず、日記というジャンルに向かうことになったのである」と述べられており、示唆に富むが、和歌そのものに対する考察は、『蜻蛉日記』の本質を明すのに依然として有効な方法と思われる。一方、木村正中氏「和歌とは何か—『蜻蛉日記』下巻末と『源氏物語』幻巻末とを通して」(『国語と国文学』至文堂 1983 05)には、和歌とは、「日常詠の側面をもって一つの人生表現をなすとともに、他方題詠的な美的形象性に則って、はじめて和歌としての表現が充足される。そうした平安時代の和歌の複雑な機能にもとづき、和歌史はそれ自体の固有な展開をもつとともに、和歌を他のジャンルの文学との密接なかわりもまた見落とすことができない」と、散文作品の中の和歌の多様な効用性について述べられている。
- 4) 当該の贈答歌群をめぐる場面が、日記全体の主題である「はかない」心情からは遠い、明るいものであることについては、例えば、川村裕子氏「蜻蛉日記上巻空白期間の意味—章明親王との和歌贈答を中心として」(『立教大学日本文学』1986 07)や、品川和子氏「蜻蛉日記についての覚え書—和歌及び和歌と散文のかかわりについて」(『学苑』1968 01)などにふれられている。

めざましと思ひしところは、いまは天下のわざをし騒ぐと聞けば、心やすし。むかしよりのことをばいかかはせむ、たへがたくとも、わが宿世のおこたりこそあめれなど、心をちちに思ひなしつつあり経るほどに、少納言の年経て、四つの品になりぬれば、殿上もおりて、司召に、いとねちけたるものの大輔などいはれぬれば、世の中をいとうとましげにて、ここかしこ通ふよりほかのありきなどもなければ、いとのだかにて二三日などあり。

さて、かの心もゆかぬ官の宮よりかくのたまへり。

みだれ糸のつかさひとつになりてしむくことなど絶えにたるらむ御返り、

絶ゆといへばいとぞ悲しき君によりおなじつかさにくるかひもなくまた、たちかへり、

夏引のいとことわりやふためみめよりありくまにほどのふるかも御返り、

七ばかりありもこそすれ夏引のいとまやはなきひとめふためにまた、宮より、

「きみとわれなほしら糸のいかにして憂きふしなくて絶えむとぞ思ふふためみめはげに少なくしてけり。忌あれば、とめつ」とのたまへる御返り、

世をふとも契おきてし仲よりはいとどゆゆしきことも見ゆらむと聞こえらる。5)

この時、兼家は、少納言から兵部大輔に移動し、官位は四位に昇進したものの、一省庁の次官ということで、昇殿はできなくなっていた⁶⁾。少納言は、内閣官房の如き位置であり、官位が低くても昇殿し枢機に与かることができたのである。閑職に回されたことに気を落した兼家は、新しい職場である兵部省に出勤しようとせず、作者の家でのんびり過ごしていたのである。そこへ上司にあたる章明親王から和歌が届けられる。

章明親王(九二四～九九〇)は、醍醐天皇の皇子(母は藤原兼輔女の更衣桑子)で、当時、詩文にすぐれた風流貴公子として名高く⁷⁾、母方の祖父兼輔が紫式部の曾祖父に当たることあつて、光源氏のモデルにもなった人物である。当該の場面においても、親王は、持ち前の好き心が動き和歌をもって兼家の出所を促そうとしたのであろう。当該の一連の贈答歌は、周知のごとく、催馬楽「夏引」を下敷にしている。

5) 本文引用は、木村正中他校注の新編日本古典文学全集本(小学館 1995)による。pp.121-122

6) 『公卿補任』によれば、兼家は天曆十年九月十一日少納言、応和二年正月七日従四位下、同年五月十六日兵部大輔。

7) 『北山抄』には、親王が作詩や管弦に造詣が深かったことが記されており、『本朝文粹』巻八の源順の詩序には、「大王ハ才華清英ニシテ、徳宇凝邃ナリ」と称讃されている。

夏引

夏引の 白糸 七量あり さ衣に 織りても着せむ 汝妻離れよ 頑に もの言ふ女かな
 なな 汝麻衣も 我が妻の如く 袂よく 着よく肩よく 小領安らに 汝着せめかも⁸⁾

この歌は、男女の掛け合いで出来たもので、初句「夏引の」からが女性の呼びかけであり、「頑に」句以下が男性の答えである。女が生糸で織った絹布の着物をたんと着せてあげるよと、好いたらしい男をよろめかせようと巧言令色をもって挑んだけれども、男は女房に惚れているらしく、そんな絹の柔らかいものなど無理に欲しくはないと、人なみの麻の着物で結構と、女房に貞節な男の意気を見せている。

催馬楽というのは、奈良時代末期から平安時代にかけて成立した民間の歌謡である。章明親王がその庶民の生活感情がずばりと出た催馬楽の歌を踏まえて和歌を詠みかけていることは、まず異様と見られるが⁹⁾、それより自分を兼家に恋心を持つ一人の女性として仮想しているところが目を引く。当該の「みだれ糸の」歌において、章明親王は、兼家を元の女房(道綱母)に惚れた男になぞらえ、また自分を夏引(夏に柔かな繭から引く上等の絹糸)で男に元の妻との別れを迫る女になぞらえており、道綱母のもとにしけ込んでいる兼家を役所に引き出そうとしている。

男と男の間で取り交わされる和歌が、男女の間の恋歌的な性格を帯びていることについては、先例がないわけではない。例えば、数多くの恋歌が収められている『万葉集』には、次のような歌が見られる。

秋の田の穂向き見がてり我が背子がふさ手折り来るをみなへしかも¹⁰⁾

(『万葉集』 卷十七 3943 家持)

をみなへし咲きたる野辺を行き巡り君を思ひ出たもとほり来ぬ

(『万葉集』 卷十七 3944 池主)

家持が「秋の田の稲穂の向きを見がてら、あなたが茎を手折ってきた女郎花だね」と歌えば、親友で従兄弟にあたる池主は「女郎花が咲いている野辺をうろうろ巡って、あなたを思い出しつつ、人目を避けて遠回りして来ました」と答え、お互いに恋の贈答歌を完成している¹¹⁾。

8) 催馬楽4 「夏引」。本文引用は、新編日本古典文学全集本(小学館 2000)による。pp.122-123

9) 実際、催馬楽「夏引」を下敷にする和歌は、当時あまり例歌が見られない。第一、「つか(東)」「ふためみめ」「七ばかり」などの言葉は、和歌の中ではあまり用いられなかったものである。

10) 和歌の引用は、『新編国歌大観』(角川書店 1983)による。以下同様。

11) これは、酒の席で互いを持ち上げあったもので、当時貴族の社交辞令だったと見られる。万葉時代には、夫と

また、平安時代にも、例えば、『伊勢物語』に次のような歌が見られる。

むかし、紀の有つねかりいきたるに、ありきてをそきけるに、よみてやりける。
君により思ひならぬよのなかの人はこれをや恋といふらむ
返し、
ならはねば世の人ごとになにかもこひとはいふととひしわれしも¹²⁾

業平は、自分の妻の父でもある紀有恒に、今まで恋を知らなかったという歌を詠みかけ、男女の恋に似た深い思いを抱いていることを示そうとしている¹³⁾。

このように男同士でも恋歌的な贈答をする場合はそれ以前にもあったが、当該の『蜻蛉日記』の贈答においては、仮想される男と女が一般的なやり方とは逆になっているのが特異である。上司と部下の和歌のやり取りでは、普通部下の方が女性に仮想され、上司である男を恋しく思うかたちになるのである¹⁴⁾。

そのような章明親王の贈歌(「みだれ糸の」歌以下)に対して、兼家の方—この和歌の贈答は、表面的には兼家との間で行われたものの、実際は道綱母が代作で関わっていたのであろう—は、催馬楽「夏引」の世界をわざとずらすかたちで応酬する。まず、「絶ゆといへば」歌においては、心だけはあなた(親王)と一つであると言い返し、男が元の妻でいいと挑んできた女を拒むかたちになっている、元の催馬楽「夏引」の世界からはみ出す。兼家の方は、出所を催す章明親王の言葉を真に受けず適当に逸らしているわけである。それに物足りないと感じた親王は、再び「夏引の」歌を贈る。多くの妻を持ち、役所に出てくる暇なんかはないはずだと、兼家の多情さを非難し、しつこく出所を催促するのである。それに対して兼家は、「七ばかり」歌によって、通い所が七つもあるから一カ所や二カ所はまったく問題にならないと、またもふざけて言い返す。兼家は、二人の仲を男女関係に取りなして執拗に誘っている章明親王の歌を、適当に言い逸らし、それを無力化しているのである。やがて、親王は、それ以上歌をもって出勤を迫ることは無駄であることを悟り、「き

か女から見た恋人の意味である「背子」が、姉妹から見た兄弟の意味としても用いられ、夫とか恋人とか、要するに性愛の相手となる対象と、血を分けた兄弟が同じふうと呼ばれた。「妹」も同じく、男から見た妻や恋人を指すだけでなく、男から見た女兄弟もさしていた。

12) 『伊勢物語』の本文引用は、新編日本古典文学全集本(小学館 1994)による。三八段。p.146。

13) 高橋睦郎氏『すらすら読める伊勢物語』(講談社 2004)には、「7. 恋の人は相聞の人」の中で、「恋と相聞は微妙に違って、恋はもっぱら男女間の性愛まわりにとどまりますが、相聞は恋を含みつつ、もっと広く肉親、友人、君臣にまで及ぶ愛情一般を指します」と述べられており、著者はそこで、『伊勢物語』の中で「男どしの恋歌めいたやりとり」が出てくる個所を、「それはある意味で、恋の時代から相聞の時代への先祖返り」と捉えられる。

14) その当時は、兼家の職位が章明親王より低かったものの、日に日に勢力を強めていく兼家だったので、それを意識したことの反映であると考えられる。

みとわれ」歌によって、「そんなに通い所があつては、気まずい思いをしないうちに、手を切った方がよさそうだ」と、兼家との仲をまたも男女関係に取りなして、二人の絶交のふりをし軽く皮肉りながら、贈答を罷めようとする。それに対して兼家は、「世をふとも」歌をもって、私たちは男女ではなく男同士だから縁が切れることはない、退散する親王に一撃を加える。二人の和歌による掛け合ひは、当然ながら道綱母を背後に構えた兼家の勝利におわる。

当該の贈答場面は、男同士でも懸想仕立ての贈答を交す和歌の一流れを汲み、仮想の世界と現実の世界の間を行き来しながら、両者の間のずれをもてあそび、絶妙な掛け合ひを繰り広げたものとして評価できよう。

3. 歌語の二重性を楽しむ

章明親王との交流場面は、その後もつづく。

そのころ五月二十余日ばかりより、四十五日の忌たがへむとて、あがたありきのところに渡りたるに、宮ただ垣を隔つるところに渡りたまひてあるに、六月ばかりかけて、雨いたう降りたるに、誰も降りこめられたるなるべし、こなたには、あやしきところなれば、漏り濡るる騒ぎをするに、かくのたまへるぞ、いとどものぐるほしき。

つれづれのながめのうちにそそくらむことのすぢこそをかしかりけれ
御返り、

いづこにもながめのそそくころなれば世にふる人はのどけからじを
また、のたまへり。「のどけからじとか。

あめのした騒ぐころしも大水に誰もこひちに濡れざらめやは」
御返り、

世とともにかつ見る人のこひちをもほす世あらじと思ひこそやれ
また、宮より、

しかもみぬ君ぞ濡るらむ常にすむところにはまだこひちだになし
「さもけしからぬ御さまかな」など言ひつつ、もろともに見る。15)

梅雨の季節に、方違えのため、倫寧の邸に移していたところ、隣の家に来ていた親王から、つれづれまぎれに和歌がよこされる。兼家(作者)の方は、親王の和歌が極度な戯れであることを知りつつも、それに同調してまたも和歌を取り交わすことになる。「いとどものぐるほ

15) 前掲書 pp.123-124

しき」は、そのような兼家側の気持を示す言葉である。

「ながめ」は、平安時代の和歌に最も頻出する歌語の一つで、「長雨」と「物思いに沈む」の二重的な意味に用いられることが多かった。当時、和歌の世界では、感動した内容をそのまま伝えるのではなく、技巧を駆使して間接的表現に努めたので、一つの言葉に二つの意味を重ねる、いわゆる掛詞が発達していたのである。

花の色は移りにけりないたずらに我が身よにふるながめせし間に

(『古今集』 第二 春 113 小町)

つれづれのながめに増える涙河袖のみぬれて逢ふよもなし

(『古今集』第十三 恋 617 敏行)

この場合、「ながめ」に「(夜に降る)長雨」と「(物思いにふける)眺め」の二つの意味が重ねられ、恋歌的な性格が強められていることに注意される。

当該の日記の場面における親王の「つれづれの」歌も、その当時の常套的な詠法に従って「ながめ」の意味を二重に持たせており、相手にしてくれない兼家を恨み寂しさを訴えるかたちをしている。それに対して、兼家の「いづこにも」歌の方は、「ながめ」という語を、わざと「長い雨」の意味だけを持たせることによって、親王の懸想仕立ての歌によるひやかしをはぐらかす¹⁶⁾。「ながめ」が「長雨」という景の世界のものに限定して用いられる場合は、当時も見られ¹⁷⁾、例えば、

つれづれのながめにわれはなりぬめりつれなき空をふる心地して

(『古今六帖』第一 あめ 469 読人不知)

のような歌がある。

当該の日記の場面では、当時頻繁に用いられた歌語「ながめ」を技巧的に駆使して和歌の掛け合いをしていると言えるが、さらに、兼家の歌においては「世」という言葉の付け加えによって遊戯性が一層高揚される。「世」は、一定の人間組織が続く間をさす語であるが、例えば、

16) 兼家の「いづこにも」歌の場合も、日常的な世間という意味のほか、「この世」を過す人は、私のように物思いが繁く、心落ち着く時もない、というような女性論理の趣が影を落しているとも見られる。

17) 和歌における「ながめ」については、吉田雅子氏「和歌的『ながめ』の再吟味」(『女子大國文』1973 08)に詳しく論じられている。また、『蜻蛉日記』の中の「ながめ」については、中川正美氏「『蜻蛉日記』の『ながめ』と『けしき』と」(『平安文学研究』1977 11)などに述べられている。

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

(『古今集』巻一 春 53 業平)

のように、世間一般の意味に用いられる場合もあれば、

世とともに流れてぞ行く涙川冬もこほらぬ水泡なりけり

(『古今集』巻十二 恋 573 読人不知)

のように、男と女の間をさす場合もあった¹⁸⁾。特に、当該の『蜻蛉日記』全体的に見れば、「世」という言葉は、男女の世の中について絶えず模索しながら傷ついている女性の論理で用いられることが多い¹⁹⁾。日記の主題と緊密に関わるものとして、次のようなものがある。

花に咲き実になりかはる世を捨ててうき葉の露とわれぞ消ぬべき

(安和二年閏五月条)

世の中にあるわが身かはわびぬればさらにあやめも知られざりけり

(天禄二年五月条)

「花に咲き」歌は、兼家の新邸にまねかれなかった頃、死へのおそれを抱きつつ自己存在の不安を詠じたものであり、「世の中に」歌は、中巻のクライマックス鳴滝参籠直前の場面において、五月の端午の節供の是非を侍女が問うた時に、我が身が何によって支えられているのか、その喪失感とともに詠み出された和歌である。

このように兼家の方は、一般的に男女の論理としてよく用いられる「世」という言葉を敢えて日常的な意味に取りなして詠んでいることが確認される²⁰⁾。男女の論理に沿って詠まれる歌語を、意識的に自然の現象の意味に限定して取り直すことによって、相手の恋歌的な趣に反発しているわけである。それに翻弄された親王は、自分の潔白さを訴える「しかもみぬ」歌をまた詠むが、それは「あめのした」歌において恋路に忙しいと自慢げに言ったこと

18) 和歌の中の「世」については、例えば、佐田公子氏「『世の中』を詠むということ—万葉から古今へ」(『霸王樹』2000 10)などに述べられており、平安女流文学との関連性については、辛島正雄氏「〈女の物語〉論のために—『世の中』の基底」(『徳島大学国語国文学』1992 03)に論じられている。

19) 『蜻蛉日記』の中の「世(の中)」については、石坂妙子氏「遠度求婚譚と道綱母—『蜻蛉日記』における「世の中」の変容」(『文芸研究』1981 05)において詳しく述べられている。

20) このように、掛詞で用いられる言葉の片方の意味だけを取って相手の和歌の意味をはぐらかす技法は、後代の『源氏物語』にも受け継がれ、例えば、「目に近く移れば変はる世の中を行く末遠く頼みけるかな」(若菜上)と紫の上が源氏に裏切られ夫婦仲に絶望したと詠んだ独詠歌に対して、光源氏は「命こそ絶ゆとも絶えめ定めなき世の常ならぬ仲の契り」と、夫婦仲の意の「世の中」を受けて、「定めなき世」という世間一般の世の中の意で切り返し、夫婦仲は変わらないと返歌を詠んでいる。

に相反する。結局、親王は自己矛盾に陥ったのである。「さもけしからぬ御さまかな」は、親王の惨敗を表わす言葉と見られる。

当該の贈答場面は、当時よく使用されていた歌句を積極的に取り入れながらも、それを再構成し新しい技巧として発展させた過程を示すものとして見ることができよう。

4. 歌の主体のすり替え

その次の贈答場面は、兼家の不在中に届いた親王の手紙によって再開される。

雨間に例の通ひどころにもしたる日、例の御文あり。「『おはせじ』と言へば、『なほ』とのみ給ふ」とて、入れたるを見れば、

「とこなつに恋しきことやなぐさむと君が垣ほにをると知らずや
さてもかひなければ、まかりぬる」とぞある。さて、二日ばかりありて、見えたれば、「これ、さてなむありし」とて見すれば、「ほど経にければ便なし」とて、ただ「このごろは仰せ言もなきこと」と聞こえられたれば、かくのたまへる、

「水まざりうらもなきさのころなれば千鳥の跡をふみはまどふか
とこそ見つけ、恨みたまふがわりなき。みづからとあるはまことか」と、女手に書きたまへり。
男の手にてこそ苦しけれ、

うらがくれ見ることかたき跡ならば潮干を待たむからきわざかな
また、宮、

「うらもなくふみやる跡をわたつうみの潮の干るまもなにかはせむ
とこそ思ひつれ、ことさまにもはた」とあり。21)

「とこなつに」歌は、形式の上では兼家あてのものとなっているが、実際は、親王が兼家の外出を見届けた上で作者に贈ったものとして見てよいであろう。親王は、兼家あての歌を装いつつも、それとなく道綱母に和歌を渡しその反応を見ようとしたのである。この歌は、実は、新婚の頃(天暦八年八月頃)、道綱母が兼家に贈った、

おもほえぬ垣ほにをれば撫子の花にぞ露はたまらざりける

に類似しているため、いざとすれば道綱母への求婚の和歌とも見做せる危うさを孕んでい

21) 前掲書 pp.124-125

る。親王は、兼家との遊戯的な贈答の中で、さらに作者に一役買わせて、一層妙味を増そうとしたに違いない。それを感知した道綱母は、返歌をせず、数日後来訪した兼家にその手紙を渡す。そして、兼家は、その手紙の存在を知らないふりをし、「このごろは仰せ言もなきこと」と、便りがなことを恨む手紙を出す。すると、親王は、「水まさり」歌によって、兼家と作者との気持がぴったり合っていて自分の手紙なんかは目もくれないから、自分がわりこむ余地がないと恨んで見せる。しかし、親王の歌は、道綱母へ文を贈った事実を暴露する意味合いを持つものであった。特に、第二句と第三句の「うらもなきさのころなれば」は、解釈によってはとんだ誤解を呼び起こすに十分なものであった。すなわち、当該の句には、例えば、

武蔵の守為方が、狩衣を借りて、二日ばかりありて返すとて
うらもなき心ならひにかりころも変へさじとまで思ひけるかな (『重之集』27)

また年ごろ家につくせることをくいて
玉の緒も結ぶ心のうらもなく打ち解けてのみ過しけるかな (『増基集』18)

のように、「浦」に「心」を、「渚」に「無き」をそれぞれかけて「隔心がない、心を許し合っている」の意味を持たせているわけであるが、その主体については二通りの解釈が可能となる。隔心なく打ち解けているのを、兼家と道綱母の間と見ることも出れば、一方では親王と道綱母の関係と見ることもできる。兼家は、その次の返歌、

うらがくれ見ることかたき跡ならば潮干を待たむからきわざかな

において、後者の意味に取ったふりをし、親王の手紙をわざわざ隠した作者を疑いの目で見ているように装っている。第五句「からきわざかな」は、心変わりした作者が再び自分に戻って心を打ち解けてくるのを待つのがとても辛いことだと嘆くものとして解される。兼家は、自分が居ない間、作者に怪しげな手紙を送りつけ二人の心をもてあそばうとした親王の意中を見抜き、それより一步進んだ語調で歌い返し、親王を困らせているのである。それ以上ふざけた歌を贈ることは無駄であることが判った親王は、「うらもなく」歌によって戯れたことを謝まり、急きよ和歌の贈答を取り止めようとする。ここにきて親王は、「『うらもなきさのころなれば』句は、あなたとあなたの妻の関係を言ったもので、決して私とあなたの妻の関係を言ったものではない。だから、自分が疎外されているように感じたとするれば、それは誤解だ」と、弁解しているのである。

章明親王は、贈答の相手をそれとなくすり替えて歌を贈り、新しい遊戯性を求めようとした

が、宮の意中を見抜いた兼家の方は、さりげなくそれを逸らし、作者の心移りを嘆き寂しさを訴える歌を詠み返すことによって、親王を困惑させたのである。また、草仮名をさらに崩した書体である女文字を使って情趣を楽しもうとした宮の好き心を、漢字をあまり崩さぬ書体である男文字でもってはぐらかす。これは、贈答歌の相手を微妙にすり替えることによって贈答の遊戯的な緊張感を高めるわざと、またそれをうまく切り返すわざを両方見せている、高度に技巧化された贈答の場面と言える。

5. 散文に予見される和歌

年改まった四月に、章明親王の要請によって同車して賀茂祭の前の御禊の見物に行ったことが記されるが、その後、次の場面がつづく。

そのころほひ過ぎてぞ、例の宮に渡りたまへるに、まゐりたれば、去年も見しに花おもしろかりき、薄むらむらしげりて、いと細やかに見えければ、「これ堀りわかたせたまはば、すこし給はらむ」と聞こえおきてしを、ほど経て河原へものするに、もろともなれば、「これぞかの宮かし」など言ひて、人を入る。「『まゐらむとするに折なき、類のあればなむ。一日とり申しし薄聞こえて」と、さぶらはむ人に言へ」とて、引き過ぎぬ。はかなき祓なれば、ほどなう帰らるに、「宮より薄」と言へば、見れば、長櫃といふものに、うるはしう堀り立てて、青き色紙に結びつけたり。見れば、かくぞ、

穂に出でば道ゆく人も招くべき宿の薄をほるがわりなき
いとをかしようも、この御返りはいかが、忘るるほど思ひやれば、かくてもありなむ。されど、さきざきもいかがとぞおぼえたるかし。22)

親王の家の薄を乞い受けたことを語る場面であるが、尾花とも呼ばれる薄は、万葉の時代から秋の七草の一つとして数えられ、平安時代では、貴族の庭に多く植えられた。平安京の中の都市生活を基本にした平安貴族たちは、自分の邸の寝殿造りの中に自然を取り込もうとし、人工的な山や池を造り、野の草をたくさん植えていたのである。中で、薄(すすき)は、「すす」が、葉がまっすぐにすくすく立つことを表わし、「き」が芽が萌え出る意味の「萌(き)」だと言われており、収穫物を悪霊から守り、翌年の豊作を祈願する意味で賞味されていた。

和歌の中で、「薄」は、「穂に出づ」句とともに詠まれることが多く、主に「人を招く」の意味で用いられた。例えば、次のような歌がある。

22) 前掲書 pp.126-128

秋の野の草の袂か花すき穂にいでて招く袖と見ゆらむ

(『古今集』巻四 秋 243 在原棟梁)

呼ぶともし声は聞えて花薄忍びに招く袖も見ゆめり

(『伊勢集』 29)

当該の親王の「穂に出でば」歌は、当時の和歌における常套の歌句を取り入れ、美しく穂に咲き出たら、ゆきずりの人だって招き寄せるに違いない我が家の薄を、御所望なればこそ掘り取って差し上げますが、何とも切ないことであります、この薄によって、あなたを招き寄せたいところなのに、という内容である。「ほる」は、「掘る」に「欲る」をかけたもので、

浅してふことをゆゆしみ山の井はほりにし濁りに影は見えぬぞ

(『後撰集』巻九 恋 531 平定文)

春の野にほるぼる見れどなかりけり世に所せき人のためには

(『拾遺集』巻十六 雑春 1033 読人不知)

のような例歌がある。この「ほる」句によって恋歌の雰囲気は漂っているとはいえ、「穂に出でば」歌はごく平凡な儀礼歌にすぎない²³⁾。特に、この前に並べられた象徴的で技巧的な一連の和歌群に比べると、かなり平易なものと言える。掛詞などによる言葉の巧妙な組み合わせが見られるわけでもなければ、知的で言語遊戯的な性格を顕在させるものでもない。また、道綱母の「はかない」心情を表白するために必ずあるべきものとも見られない。そんな平易な歌であるため、返歌もまた特筆すべきものではないとし、「いとをかしようも、この御返りはいかが、忘るほど思ひやれば」という結果になってしまったのであろう。では、このように日常的な歌を書きとどめた理由はどこにあるのだろうか。

この場合は、散文がこれまでとはちがった機能を見せはじめ、和歌を導くかたちになっていると考えられる²⁴⁾。すなわち、「薄を乞う」道綱母(兼家)の行動を描く散文は、すでに次にくる和歌を予見させているのである。「薄」をめぐる述べられる散文は、「穂に出る」という和歌の句を必然的に引き出し、いよいよ章明親王との贈答をおわりにすることへと結び付けられる。「薄が欲しいと言ひ出す」→「薄を掘って贈る」→「薄によって人を呼

23) 斎藤菜穂子氏「蜻蛉日記の『鶯』—歌語からひらかれてゆく表現世界」(『中古文学論攷』2000 3)には、歌語「鶯」の磁力をもととして散文において心情描写がなされることが論じられている。

24) 長戸千恵子氏「『蜻蛉日記』における和歌素材と散文との関係—上巻を中心に」(『人間文化研究年報』1990 3)においては、和歌から散文への展開をいくつかの類型に分けて説明している。本稿は、それを発展させてより複雑な創作方法として考察したものとなる。

び寄せることができなくなる」→「もう人の訪れがなくなる」→「それ以上会うことがない」の展開構造になるのである。

ここにきて、和歌は活気を失い、散文の一部として吸収されるようになる。和歌が技巧的で優れたものであれば、散文によって補われる必要がない。その反面、和歌が日常的な段階に留まっているものであれば、散文による補充が必要となるだろう。しばしば言われることであるが、道綱母が「かげろうの日記」を書こうと思い立った時、まずその資料となったのは、かつての生活の折々に作られていた詠み草であろう。彼女は、手元に集め置いたそれらの詠み草を手がかりにして、過去をよりよく思い出し、日記執筆の拠所としたのである。後から散文を加えるので、散文は、独立し、三十一文字の内部で完結していた和歌の世界を侵さず、余分な付け足しだという感じにもなりおわることなく、むしろ和歌を抱え込んで、より豊かな、異った次元の質を有する世界を、作り出すものでなければならない。当該の場面は、作者が後日回想して書き綴る際、出来事の経緯をわりと詳しく語る前の散文部分を書き込み、それを読み進む読者に「穂に出でば」歌をあらかじめ予想させる技法を意図したものではないだろうか。そして、それは章明親王との交流の終焉を告げるものでもあった。当時の読者は、薄乞いを語る散文部分においてすでに「穂に出でば」歌を予見できたであろう。親王の和歌を読んだ作者の反応が「いとをかし」となっているのも、実際の場面で或る程度作者が親王の和歌を予見していたことを窺わせる。当該の贈答の場面は、ごく平凡な和歌が散文の中で如何に方法化していくかの過程を示すものとして重要であると言える。

以後、兼家は左京大夫に転じ、政界での地位を得ていくことにつれ、章明親王との交際は途切れる。これは、散文によって和歌を予見させ、文の流れを前もってかたどる、新しい試みと見られる。

6. おわりに

道綱母の生涯において、最も身近で、しかも重要な役割を果たしているのが和歌である。『蜻蛉日記』にもまた、身の上を構成する素材として、『百人一首』によって知られる「なげきつつひとり寝る夜のあるまはいかに久しきものとかは知る」(天曆九年十月条)という歌をはじめ、多くの和歌が用いられており、日記の創造自体が彼女の歌人的資質や和歌的発想によって実現されていると言える。また、日記以後においても、所謂、「卷末家集」によって知られる、東三条女院詮子や中将の尼との歌による交渉の事実や、「寛和二年六月十日内裏歌合」と「正暦四年五日東宮居貞親王帯刀陣歌合」への詠進という事実は、彼女がその最晩年に到るまで和歌の名手として活動していたことを物語る。兼家も、また、当時平均的な和歌に対する資質は備えており、和歌的情趣を解し、それによ

て動かされる好き心があった人であった。道綱母が、自己の詠歌世界の良き理解者であり、また己が歌才と匹敵し得ると見做した兼家の和歌ならびに自分の歌才を顕示しようとした面があったことは否めないと思う。

しかも、日記の中には、貞観殿登子や冷泉天皇女御怱子、藤原佐理の妻といった、当時の貴族社会における一流貴顕達との交流を描く部分がある。これらの部分には、わが身を「ものはかなし」と嘆く作者の姿勢は全く見られず、むしろ、上流貴顕との交遊を誇示しているとも見られ、ほかの部分とは大きな断絶がある。当該の章明親王との交流ぶりも、その一つであり、そうした自己の文学的基盤を明らかにするという積極的な意図において創作されたものと考えられる。章明親王が男性であるため、直接的な和歌のやり取りはできず兼家を通じて行われるかたちになっているだけである。

そのような意味で、当該の贈答歌の場面は、和歌の様々な試みの場であり、散文と和歌の新しい絡み合いを見せるためのものであった。日記に記された和歌は、作者の手元にあった歌稿によったとしても、その当時に詠まれたものが、作者の回想の時間を経て、執筆時の作者の意識によって再構成されたものであることは言うまでもない。作者は、体験の時の和歌を、執筆時の意識によって散文とともに再構成したのである。それは単に散文部分を付け足すだけのものではなく、散文では表現し得ないものを表現する和歌を散文の中に取り込んでいく過程で、身の上を書くという道綱母の主題意識を実現させるようになったのではないだろうか。『古今集』などの和歌を共通の教養の基盤としながら、道綱母や兼家が繰り広げた和歌贈答の場面において、和歌は散文との関係によって意味付けられるようになったのである。和歌はそれをめぐる散文との関係の中で読み直されることで、作者がこの日記で描こうとしたものが、より鮮明になると思われる。

【参考文献】

- ・木村正中氏他『土佐日記 蜻蛉日記』（新編日本古典文学全集 小学館 1995）pp.121-128
- ・白田甚五郎氏他『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』（新編日本古典文学全集 小学館 2000）pp.122-123
- ・片桐洋一氏他『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（新編日本古典文学全集 小学館 1994）p.146
- ・松下大三郎氏他編『新編国歌大観』（角川出版 1983）

- ・今西祐一郎氏「歌・歌集・蜻蛉日記」(『新日本古典文学大系 蜻蛉日記』1989 岩波書店) pp. 515-534
- ・鈴木裕子氏「『蜻蛉日記』上巻の和歌―『百草に』と『身のあきを』の贈答歌について」(『駒沢短大国文』1999 03) pp. 18-30
- ・川村裕子氏「右大将道綱母の結婚と人生―和歌を中心に」(『女流日記文学講座 第二巻 蜻蛉日記』1990 勉誠社) pp. 258-278
- ・増田繁夫氏「『蜻蛉日記』の和歌―十世紀後半の和歌史」(『国語と国文学』至文堂 1995 05) pp. 33-43
- ・木村正中氏「和歌とは何か―『蜻蛉日記』下巻末と『源氏物語』幻巻末とを通して」(『国語と国文学』至文堂 1983 05) pp. 54-66
- ・川村裕子氏「蜻蛉日記上巻空白期間の意味―章明親王との和歌贈答を中心として」(『立教大学日本文学』1986 07) pp. 2-12
- ・品川和子氏「蜻蛉日記についての覚え書―和歌及び和歌と散文のかかわりについて」(『学苑』1968 01 昭和女子大学 近代文化研究所) pp. 82-103
- ・吉田雅子氏「和歌的『ながめ』の再吟味」(『女子大國文』1973 08) pp. 30-42
- ・中川正美氏「『蜻蛉日記』の『ながめ』と『けしき』と」(『平安文学研究』1977 11) pp. 4-18
- ・佐田公子氏「『世の中』を詠むということ―万葉から古今へ」(『霸王樹』2000 10) pp. 14-26
- ・辛島正雄氏「<女の物語>論のために―『世の中』の基底」(『徳島大学国語国文学』1992 03) pp. 21-42
- ・石坂妙子氏「遠度求婚譚と道綱母―『蜻蛉日記』における「世の中」の変容」(『文芸研究』1981 05) pp. 33-45
- ・斎藤菜穂子氏「蜻蛉日記の『鶯』―歌語からひらかれてゆく表現世界」(『中古文学論攷』2000 3) pp. 14-21
- ・長戸千恵子氏「『蜻蛉日記』における和歌素材と散文との関係―上巻を中心に」(『人間文化研究年報』1990 3) pp. 93-106
- ・針本正行氏「蜻蛉日記上巻に引用された古今和歌集歌―『きみをおきてあだし心をわが持たば末の松山浪もこえなん』を中心として」(『王朝文学史稿』1996 3) pp. 88-96
- ・松田成穂氏「『かげろふの日記』上巻に関する試論―和歌の問題に触れながら」(『平安文学研究』1960 11) pp. 71-81
- ・岡田博子氏「蜻蛉日記の和歌表現(二)―屏風歌と奉納歌の所収場所の位置づけ」(『二松学舎大学人文論叢』1992 10) pp. 123-140

要 旨

『蜻蛉日記』には、二六一首の和歌(長歌三首、連歌二組を含む)が記されているが、上巻には一二六首が数えられ、中巻の五五首と下巻の八十首を圧倒的に上回る。和歌が上巻の中で如何なる役割を果たしているか、を見なければならぬのだが、特に章明親王との贈答歌群は、ちょうど天徳二年七月から応和二年にかけての三年半の空白の直後に配置されており、日記創作において作者の和歌への特別な意気込みを感じさせるものとして注目される。

当該の贈答歌の場面は、和歌の多様な技巧の試みと、散文と和歌の新しい絡み合いを見せるものであった。具体的には、催馬歌「夏引」を下敷にして仮想の恋歌の世界を作り上げたり、「ながめ」や「世」などの当時女性論理の中で多用されていた歌語を技巧化したり、歌の主体をすり替えることによって緊張感を高めたり、また散文によってあらかじめ和歌を予見させたりする。

日記に記された和歌は、作者の手元にあった歌稿によったとしても、その当時に詠まれたものが、作者の回想の時間を経て、執筆時の作者の意識によって再構成されたものであることは言うまでもない。作者は、体験の時の和歌を、執筆時の意識によって散文とともに再構成したのである。それは単に散文部分を付け足すだけのものではなく、散文では表現し得ないものを表現する和歌を散文の中に取り込んでいく過程で、身の上を書くという道綱母の主題意識を実現させるようになったのではないかと考えられる。『古今集』などの和歌を共通の教養の基盤としながら、兼家(道綱母)と章明親王の間で繰り広げられた和歌の贈答は、和歌が散文との関係によって意味付けられる様子をよく示している。和歌はそれをめぐる散文との関係の中で読み直されるので、作者は和歌と散文の新しい組み合わせを様々なかたちで試して見せようとしたのであり、それによって日記の内的論理を構築していったものと見られる。

キーワード：『蜻蛉日記』、和歌、道綱母、平安文学、日記文学、掛詞、贈答歌、散文

투 고 : 2009. 8. 31

1차 심사 : 2009. 9. 12

2차 심사 : 2009. 9. 26